



TITLE:

京大広報 No. 684

AUTHOR(S):

京都大学渉外部広報・社会連携推進室

---

CITATION:

京都大学渉外部広報・社会連携推進室. 京大広報 No. 684. 京大広報  
2012, 684: 3775-3794

ISSUE DATE:

2012-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196392>

RIGHT:



# 京大広報

No. 684

2012.12



第7回京都大学ホームカミングデイ

(左上)懇親会でのチアリーディング(左下)清風荘での茶道部による呈茶

(右)京都大学合唱団同窓会の合唱

—関連記事 本文3779ページ—

## 目次

学生支援の国際化 学生・図書館担当理事 赤松 明彦	3776
〈大学の動き〉	
第7回京都大学ホームカミングデイを開催	3779
ユネスコと京都大学のインターンシップ協定の 締結式およびユネスコ事務局長の講演会を開催	3780
〈部局の動き〉	
経済研究所創立50周年記念行事を開催	3780
博士課程教育リーディングプログラム(オール ラウンド型)「京都大学大学院思修館」平成24 年度履修生開講式を挙行	3781
〈寸言〉	
フレキシブルに変革を 富増 弘	3782
〈随想〉	
現代経済学の基礎づくりに貢献した京都学派 名誉教授 西村 和雄	3783
〈洛書〉	
旅三昧 黒田 知宏	3784

〈栄誉〉	
山中伸弥 iPS 細胞研究所長、山田康之名誉教授 が文化勲章を受章	3785
朝尾直弘名誉教授、諸熊奎治福井謙一記念研究 センターシニアリサーチフェローが文化功勞 者に選ばれる	3786
西村和雄名誉教授が紫綬褒章を受章	3787
〈話題〉	
京都賞生物特別講義を開催	3788
杜寺見学会を実施	3789
京都大学宇治キャンパス公開2012を開催	3789
宇治キャンパスでリサイクルフェア・交流会を 開催	3790
第3回京都大学風景写真コンテスト表彰式を 開催	3791
韓国・ソウル大学で AEARU「18th Annual General Meeting」を開催	3793
教育学研究科附属臨床教育実践研究センター公開 講座「精神分析とこころの解放」を開催	3793
〈訃報〉	3794

京都大学渉外部広報・社会連携推進室

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

## 学生支援の国際化

学生・図書館担当理事・副学長 赤松 明彦

国立大学法人への文部科学省からの運営費交付金が毎年削減される中で、ここ数年確実に配慮されている項目がある。障害学生支援に関するものと授業料免除・奨学金に関連するものとである。これには、次の二つの国際条約にかかわる日本国政府の取り組みが背景にある。

①「障害者の権利に関する条約」(Convention on the Rights of Persons with Disabilities)の批准に向けた取り組み。

②「経済的・社会的及び文化的権利に関する国際規約(国際人権A規約)」の第13条2項(b)(c)の規定にかかわる留保の撤回。つまり、「高等教育の無償化」に向けた取り組み。

ここでは、この二つについて、京都大学における取り組みや平成25年度の文部科学省高等教育局概算要求などに触れながら述べるとともに、学生支援のあり方が大学の国際化においても問われている状況について考えてみることにしたい。

### 障害学生支援

「障害者の権利に関する条約」は、平成18年の第61回国連総会において採択されたもので、今年の10月現在で125カ国が批准しているが、日本政府は米国とともにまだ批准していない。しかし、政府は、昨年8月に、「障害者基本法」の改正を行い、批准に向けた国内法の整備を行っている。本年10月31日に、国立七大学の学生担当副学長が名古屋に集まって会合をもったが、その席での文部科学省からの説明によれば、ここ2、3年の内には日本も批准するということであった。こうした状況の中で、文部科学省でも高等教育機関における障害学生支援の仕組みを充実させる方向で、来年度予算ではいくつかの施策を実施しようとしているところである。



障害学生支援については、各大学とも組織や制度を作り始めたばかりであるが、京都大学では、比較的早く平成20年に「身体障害学生相談室」が開室された。爾来、室長の津田

謹輔人間・環境学研究科教授、そして現特定職員の村田淳さんという優れたコーディネーターの献身的な努力があって、大学における障害学生支援の先駆者としての評価を内外から得ている。昨年からはその名前を「障害学生支援室」と改めたが、これもいちはやく「障害者基本法」の改正に対応した結果である。ここには、先の国際条約に基づく重要な理念が盛り込まれているのである。最近では、「障がい」という表記を目にすることも多いが、京都大学では「障害」という表記を使っている。それは、「障害」は、端的に言って「個人ではなく社会の問題」だととらえているからである。これについては、先の国際条約でも明確に次のように述べられている。

「(この条約の締約国は,)障害(disability; handicap)が、発展する概念であり、並びに障害者(persons with impairments; des personnes présentant des incapacités)と障害者に対する態度及び環境による障壁との間の相互作用であって、障害者が他の者と平等に社会に完全かつ効果的に参加することを妨げるものによって生ずることを認め(る)」(条約の前文(e)項。外務省が公表している仮訳文を引用。カッコ内の英語とフランス語は原文のもの。)

補った原語を見てもらえばわかるように、英語やフランス語の原文では、(そしておそらくは、アラビア語でも、中国語でも、ロシア語でも、スペイン語でも)この一文で言われる「障害者」は、先に示し



たこの条約のタイトルに含まれる「障害者」(persons with disabilities; les personnes handicapées)とは表現が異なっている。残念なことに外務省の日本語訳では、ともに「障害者」となっているが、ここであえて訳し分けるならば、この一文に現れる語は、「障がい者」と訳し、条約のタイトルおよびこの条約中の他の箇所にくり返し現れる語は、「障害者」と訳すのがよいのではなかろうか。つまり、「障害者」が「(例えば身体的な)障がいをもつ」と言う場合には表記に配慮がなされる必要があるが、「障害のある人(社会的な妨げを受けている人)」という意味であるならば、「障害者」という表記を使うことができると考えるのである。今後一般的には、おそらく「障がい」という表記が増えてくるであろうが、この語の背後に、こうした条約中の文言の問題もあることを知っておきたい。

#### 授業料免除と奨学金

次に、「国際人権A規約」の第13条2項(b)(c)の規定に関してである。これについては次のような外務省告示が今年の9月に出された。

#### 外務省告示第318号

日本国政府は、昭和41年12月16日にニューヨークで作成された「経済的、社会的及び文化的権利に関する国際規約」の批准書を寄託した際に、同規約第13条2(b)及び(c)の規定の適用に当たり、これらの規定にいう「特に、無償教育の漸進的な導入により」に拘束されない権利を留保していたところ、同留保を撤回する旨を平成24年9月11日に国際連合事務総長に通告した。よって、日本国は、平成24年9月11日より、これらの規定の適用に当たり、これらの規定にいう「特に、無償教育の漸進的な導入により」に拘束される。

平成24年9月24日 外務大臣 玄葉光一郎

この留保の撤回によって、すぐに高等教育における無償化が実現するわけではもちろんない。しかし、教育の機会均等は、教育基本法第1章第4条によっ

て定められたものであり、その3項には、「国及び地方公共団体は、能力があるにもかかわらず、経済的理由によって修学が困難な者に対して、奨学の措置を講じなければならない。」とその義務を定めているのは周知のことである。授業料の無償化の実現がすぐには無理であるとしても、無償化に向けた漸進的な取り組みは必要である。そうした中で、文部科学省は、このところ授業料免除枠の拡大と奨学金制度の改善を図ってきている。昨年そして今年と、給付型奨学金の制度についても実現はしなかったが内部では検討はされたようである。その結果、平成25年度の概算要求案では、イギリスの学費ローンに見られるような「所得連動返済型の無利子奨学金制度」の導入が図られることになった。ちなみに京都大学における平成24年度の授業料免除実施額は11億円余、対象者数は、全額免除と半額免除を合わせて前期と後期でそれぞれ約3,000名(うち留学生は約600名)である。ともあれ、いまず「無償化」というのは不可能であろうが、ではどういう大学であれば無償化が可能になるのかということも問いながら、時間をかけて近づいていくべき目標だと思っている。

#### 学生支援ランキング

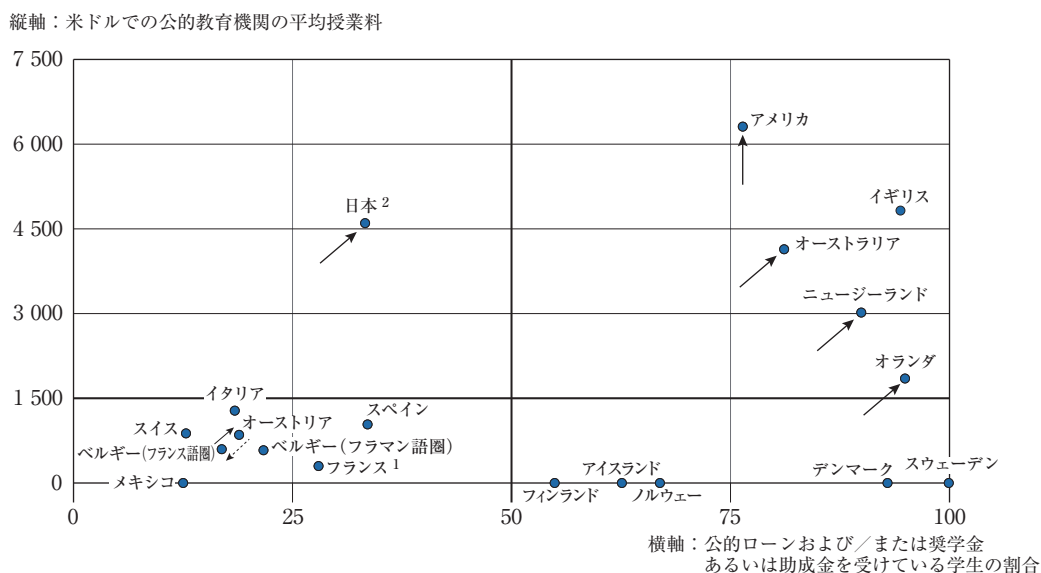
国際的に見て、日本の大学の学費は極めて高く、奨学金などの公的な支援の率は極めて低い。今年もまた、OECDが発行するEducation at a Glance 2012: OECD Indicators (p.272, Chart B5.1.)には、高等教育における高負担低支援の唯一の国として日本ががっている。OECD発行のものとは別に、Global Higher Education Rankings 2010, Affordability and Accessibility in Comparative Perspectiveというのもあるが、そこでは、「日本は奨学金制度(a system of grants)を全くもたない唯一の国である」と紹介されている。このレポートは、Higher Education Strategy Associatesという組織が出しているものであるが、豪、加、英、独、仏、メキシコ、蘭、米、スウェーデン、フィンランド、ノルウェー、デンマーク、ラトヴィア、ニュージーランド、それに日本の15カ国における高等教育のaffordabilityつまり費用

負担の難易度と、accessibility入学の難易度を国際比較している。日本にも、国費の給費留学生の制度もあれば、奨学金の返還免除の制度もあるので、「奨学金ゼロ」(p.18)という表を見せられると抗議をしたくなるが、「奨学金」は給付が原則であり、貸与の「学資ローン」とは区別するのが国際標準だとすれば、「ゼロ」と言われても仕方ないかもしれない。(OECDのレポートでも、日本は、奨学金なしの学資ローンだけの国になっている。)そして、このaffordabilityのランキングにおいて、日本は第14位で、メキシコが最下位。米は12位、豪は13位である。上位を占めるのは例によって北欧勢であるが、その表の欄外には但し書きがあって、「米とメキシコにおいては公立と私立の学費の差は大きいから、もし公立の大学だけを比較するなら、米は9位の加と同じランク、メキシコも豪と同じランクとなろう」とされている。つまり、日本だけがダントツの最下位

ということになるというのである。要するに、日本の大学は、国際的に見て、極めて入りにくいと見られているのである。

そういった点も踏まえて、留学生に対しては、大学間の学生交流協定を結んで授業料を不徴収にしたり奨学金の制度を手厚くしたりして対応することになるのだが、真に国際的な評価をあげるためには、留学生と自国の学生を区別するのではなくて、留学生も含めた学生全般に対する支援を、これまでの何倍もの努力で、政府も大学も行う必要があるだろう。その場合、なにより望ましいのは、給付の奨学金制度を作ることである。そうすれば、国際規約に則った「高等教育の無償化」の実現に近づくことになる。学生支援の国際化とは、留学生を特別扱いすることではない。学生担当理事としては、まさに留学生も含めた学生全体の支援の充実をはかることを目指したいと思っている。

Chart B5.1. 高等教育における公的教育機関の平均授業料と公的ローンおよび／または奨学金あるいは助成金を受けている学生の割合との関係  
留学生でない正規生、平均購買力平価をもとに米ドルの額を換算した



1. フランス教育省所管の大学の平均授業料は190～1309米ドルになる。
2. 日本の国公立教育機関の授業料に言及しているが、2/3以上の学生が私立教育機関に通っている。  
実線の矢印は、平均授業料と公的ローンを受ける学生の割合との関係が1995年以降の改革によってどう変化したかを示す。破線の矢印は、2008～09年以降の改革による変化の予測を示す。

原本は英語でOECDから出版された。

OECD (2012), Education at a Glance 2012: OECD Indicators, OECD Publishing.

<http://dx.doi.org/10.1787/eag-2012-en>.

原語と比べた場合の翻訳の質および一貫性については訳者の責任に帰す。原本と翻訳に齟齬が生じた場合は英語の原本が優先する。

## 大学の動き

### 第7回京都大学ホームカミングデイを開催

11月10日(土)に「今を見つめ未来(あす)を考える」をテーマとし、「第7回京都大学ホームカミングデイ」を開催した。同窓生(卒業生、元教職員等)、教職員、学生など延べ約2,100名の参加があった。

百周年時計台記念館 百周年記念ホールでは、京都大学同窓会代表幹事の小寺秀俊 理事・副学長の進行で、京都大学同窓会会長の松本 紘総長から、



挨拶する横内会長

「交流を深め、皆さんとともに未来(あす)を考える機会としたい」との開会の挨拶があった後、京都大学同窓会役員代表として横内龍三 北海道京大大会会長(法学部・1967年卒)の挨拶があった。



講演する鳥越氏

講演会では、満員となった会場で、ジャーナリストの鳥越俊太郎氏(文学部・1965年卒)の「京都大学のチカラ」と題する講演があった。

この後、会場を同記念館 2階の国際交流ホール

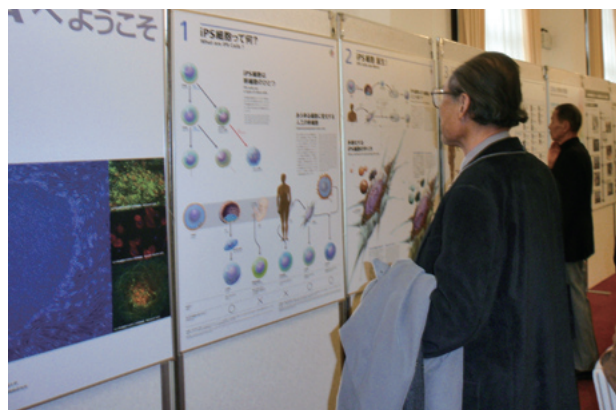
に移し、阿辻哲次 理事補の進行により行った懇親会では、オープニングに学生サークルTREVISによるチアリーダーが披露され、続いて、赤松明彦 理事・副学長の挨拶と乾杯の発声があった。文化系・体育系クラブをはじめとする多くの学生の参加もあり、会場が華やかに盛り上がる中、柴田大樹 応援団副団長のリードにより、参加者全員で第一応援歌「新生の息吹」を合唱し、盛況のうちに懇親会は閉会となった。

午後の部の音楽会では、京都大学交響楽団51名による「ニュルンベルクのマイスタージンガー」、「カルメン」などの演奏があった。続いて、京都大学合唱団同窓会75名による「学歌」、「ふるさとの四季」などの合唱があり、最後は全員で「琵琶湖周航の歌」を合唱した。

他の企画として、百周年時計台記念館の京大サロンにおいて、山中伸弥 iPS細胞研究所長・教授のノーベル生理学・医学賞受賞を記念して、その研究の一面を紹介したパネル展示と、第3回京都大学風景写真コンテスト入賞作品の展示を行った。また、旧石油化学階段教室および旧解剖学教室講堂での講義に参加する授業体験ツアーを実施した。施設見学では、本年7月に建物群が重要文化財に指定された清風荘に295名の見学者があり、尊攘堂や附属図書館、総合博物館特別展「クニマスと共にー過去から未来へー」にも多数の見学者があった。

このほか、百周年時計台記念館と楽友会館においては、学部学科等同窓会や地域同窓会の講演会、懇親会が開かれた。また、同記念館国際交流ホールでは、「OG・OBと学部学生・大学院学生との交流会」を開催し、若手卒業生と現役学生が就職をテーマに熱心に意見交換をするなど、賑やかな一日となった。

次回は平成25年11月に開催を予定している。



山中教授ノーベル賞受賞記念のパネル展示風景



旧解剖学教室授業体験ツアー

(渉外部)



## ユネスコと京都大学のインターンシップ協定の締結式およびユネスコ事務局長の講演会を開催

11月6日(火)、イリーナ・ボコバ 国際連合教育科学文化機関(ユネスコ)事務局長が本学を訪問し、かねてより協議を進めていた本学とユネスコとのインターンシップ協定を締結した。

このインターンシップ協定は、次世代を担いグローバルに活躍できる人材を育成することを目的として、学生および教職員に、国際機関での業務経験を通じて、学問的知識や国際的素養を高める機会を提供するものとして締結された。

締結式には本学およびユネスコ関係者のほか、文部科学省や外務省の担当官も立ち会い、終始なごやかな雰囲気の中で進められた。

その後、ボコバ事務局長による講演会「京都とユネスコー学びと文化遺産のパートナーシップ」が百周年時計台記念館の百周年記念ホールにおいて開催された。学内外から300人を超える参加者が集まり、会場は熱気に包まれた。

講演でボコバ事務局長は、「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。」というユネスコ憲章の理念について触れ、「文化遺産と文化的多様性は、人々のアイデンティティーと結束の源であり、イノベーションと創造の源泉です。」「文化遺産とは単



ユネスコと本学のインターンシップ協定の締結を終えて握手する石ではなく、生きています。そして、地域コミュニティの生活とつながってこそ意味を持ちます。」と熱く語られた。そして、これから文化遺産を守り活用していくために、若い世代への教育が重要であることと、そのためのユネスコの活動について説明され、若い世代への期待を表明された。

講演の後には、会場から多くの質問があったが、ボコバ事務局長は、ひとつひとつ丁寧に回答され、特に若い学生たちには、温かい激励の言葉をかけられた。

(研究国際部)

## 部局の動き

### 経済研究所創立50周年記念行事を開催

経済研究所では、去る11月1日(木)に芝蘭会館稲盛ホール・山内ホールにおいて創立50周年記念行事を開催した。

記念行事は三部構成で行われ、記念講演会では「日本とアジアの経済力」をテーマに、独立行政法人経済産業研究所藤田昌久所長による「日本とアジアの新たな発展に向けての国際協力-サプライチェーンと知のネットワークの再構築-」、ソウル国立大学経済研究所李榮薫所長による「20世紀の韓国経済発展の歴史的背景」、本研究所矢野 誠教授による「金融危機はなぜ続くのか-21世紀経済の進むべき道-」の3つの講演が行われ、これからの世界経済の行く末にも踏み込んだ講演となった。

記念式典では、本研究所溝端佐登史所長の式辞、松本 紘総長の挨拶に続き、ソウル国立大学経済学部 In June Kim 教授、文部科学省研究振興局学術機関課澤川和宏課長、日本経済学会樋口美雄会長、国家研究大学ロシア高等経済大学院Andrei Yakovlev副学長から祝辞が述べられた。また、ロシア高等経済大学院及びソウル国立大学から記念品が贈呈された。

記念祝賀会では、ソウル国立大学Youngsub Chun教授により祝辞が述べられ、滋賀大学佐和隆光学長、本学生存圏研究所津田敏隆所長、西阪 昇理事・副学長から挨拶があり、和やかな雰囲気のか歓談し盛大に50周年を祝った。

また、本研究所では、11月22日(木)京都大学東京  
オフィスにおいて「経済学のフロンティアと日本経

済の行方」をテーマに記念講演会を開催した。



式辞を述べる溝端所長

(経済研究所)

## 博士課程教育リーディングプログラム(オールラウンド型)「京都大学大学院思修館」平成24年度履修生開講式を挙

平成23年度博士課程教育リーディングプログラムのオールラウンド型に採択された「京都大学大学院思修館」の平成24年度履修生の開講式およびガイダンスを10月26日(金)京都大学近衛館にて開催した。

まず、松本 紘 総長が履修生として選抜された7名に対してお祝いの言葉を述べ、さらに本プログラム責任者 淡路敏之 理事・副学長(教育担当)の代理として、中村佳正 理事補(教育担当)の挨拶があった。続いて、履修生ひとりひとりが紹介され、履修生代表が誓いのことばを述べた。最後に、プログラムコーディネータの川井秀一 生存圏研究所教授からお祝いと激励をこめた挨拶があり、これより思修館プログラムが正式に開始となった。

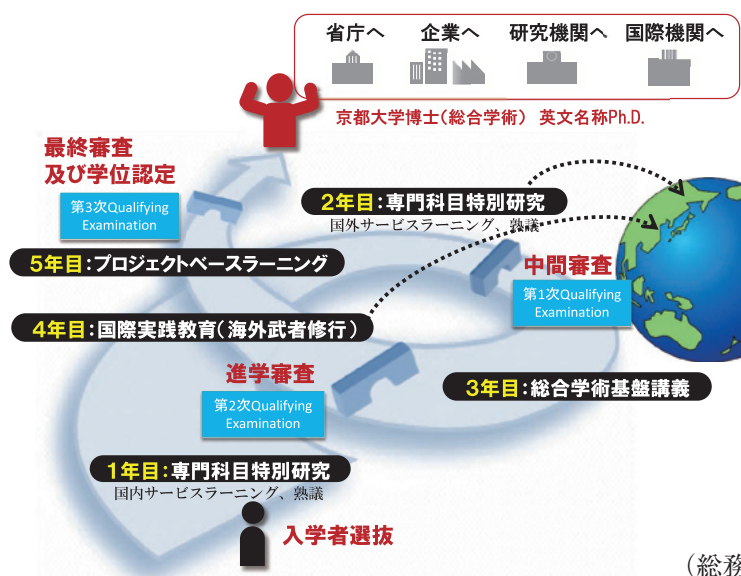


誓いのことば

また、開講式に引き続き行われたガイダンスでは、教職員の紹介とともに熟議や国内サービシングについての説明があった。

### 「京都大学大学院思修館」プログラム

高い使命感・倫理観を有するグローバルリーダーとしての責任を持ち、種々のプレッシャーに耐え、広い知識と深い専門性を両立させた柔軟性ある思考で既存の学問や課題領域を束ねることができ、かつ国内外での豊富な実践教育を通じて、「現場」での的確な判断力・行動力を備えたリーダーたる人材を育成する5年一貫プログラム。



(総務部)



## 寸言

## フレキシブルに変革を

富増 弘

京大iPS細胞研究所の山中伸弥所長がノーベル生理学・医学賞を受賞されましたが、畑は違えど研究者としてキャリア・スタートした身として、このような未来の可能性を切り拓く素晴らしい研究が京大から生まれ、それが世界的に評価されたことに、多くの在學生、卒業生や教職員の皆様と同様、純粋に喜び、誇りに思っています。



様々な分野で日々革新が生まれているのは言わずもがなですが、先日、松本総長とお話する機会があり、京大でも様々な変革を推進されていることを伺いました。中でも文部科学省「博士課程教育リーディングプログラム」に採択され、真のグローバルリーダーの育成を目的とした「思修館」は、自分も若ければ是非とも参加したいプログラムです。大学としては、十分な歴史と規模を既に持ちながら、この様に変革と成長を求め続ける京大の姿勢は、企業経営にも求められていることであり、非常に強い共感を覚えました。

私が学部を卒業したのは30年以上前であり、気付けば在学中には思いもよらなかったキャリア・パスを歩んで来ました。薬学部卒業後に入社したのは異業界の三菱製紙でした。研究開発職でキャリアをスタートし、その後社費でアメリカに留学させて貰いましたが、それが人生の転機となり、結局アメリカで15年間、ドイツで2年間生活することになりました。その間、一人前の研究者になるために京大農学研究科で博士号を取得したり、アメリカン・ドリームを追い求めて世界最大のインターナショナル・ペーパーに転職したりしました。しかし、ある時、いくら良い製品を開発してもしっかりとマーケティング戦略が無ければ売れないと悟り、ビジネスに転向しようと決意しました。そこで、アメリカでMBAを取得し、アメリカ、ドイツ、日本の3か国で会社経営に携わりました。様々な国や分野で新た

なチャレンジを追い求めてきましたが、異国での貴重な経験や研究者としてのバックグラウンドが付加価値となり、全てが蓄積されて今の自分が在ると感じています。

2年前に、またも畑違いである流体システムを取り扱うスウェーデン・ロック・ジャパンの代表取締役役に転身しました。就任した頃は、国内に8社あった販売会社が統合されて間もない頃でしたが、当時から、新しい会社の文化の醸成、そして、システムやプロセスの統合の完成、と経営者として非常に大きなチャレンジに立ち向かっています。既存のものを変えるのは簡単なことではありませんが、事業環境の変化に合わせて経営形態も変えていかなければ生き残れません。ジョン・P・コッターとホルガー・ラスゲバーによる『カモメになったペンギン』という本にある、変革を成功させるためのプロセスの中に、“変革のビジョンと戦略を立て、それを周知徹底する”という項目があります。企業でも様々な人がいるので、全員で同じ方向性を共有するのは難しいのですが、経営者として会社のビジョン、使命や価値を掲げ、目標や戦略を明確にすることで、ステークホルダーの理解を得てきました。現在も社員の提案を基に全体朝礼を復活させるなど、様々な形で社員全員に変革のビジョンが浸透するよう努めながら、よりリーンで効率的なオペレーションの実現を目指しています。

京大の伝統である「自由の学風」は、枠に囚われず変化に富んだキャリアを歩んできた私にも知らず知らずのうちにDNAとして影響を与えていると感じています。しかし京大とて、ただ自由に任せて変革を怠っていては時代や周囲の変化に取り残されてしまいます。京大では現在様々な変革を試みておられる様ですが、個々の在學生や教職員も、それぞれが現状を俯瞰してトレンドを読み、未来を見据えつつ変化を受け入れる土台を作る必要があるのではないのでしょうか。長い歴史に新たな変革を加えたその先に、日本、そして世界を牽引し続ける姿がある信じ、京大の変革の成功を祈っています。

(とみす ひろし 日本スウェーデン・ロックFST株式会社 代表取締役 昭和56年薬学部卒業)

## 随想

現代経済学の基礎づくりに貢献した  
京都学派

名誉教授 西村 和雄

山中伸弥iPS細胞研究所所長がノーベル生理学・医学賞を受賞したのは、京都大学に関係する者にとって非常に嬉しいニュースであった。一方、経済学では、ノーベル賞を期待される日本人経済学者もいるが、受賞者はまだ出ていない。日本ではマルクス経済学が長い間主流であり続けたことが、その理由の一つかもしれない。しかし、戦前の日本、しかも、京都大学に、国際的な経済学を先導していた学者が既にいたことを忘れるべきではない。

そうした京都学派の先駆者として、根岸 隆東京大学名誉教授は、高田保馬、柴田 敬、青山秀夫の3人をあげている。

たしかに、私が大学生の頃、図書館で各大学の経済学部の紀要のバックナンバーをみて、戦前の日本の大学の紀要に、数理的でかつ独創的な論文を発見し、わくわくしたのを覚えている。独断と偏見ではあるが、私の記憶に強く残る現代経済学の基礎づくりに貢献した先達について述べたい。

京都大学経済学部の高田保馬(1883～1972年)は、日本の社会学と経済学を大きく発展させ、100を超える著書と500を超える論文を著した巨人である。高田は、1943年に京都大学を60歳で退職した後、67歳から71歳まで大阪大学に勤めた。1954年には、森嶋通夫と共に、経済学部附属施設として阪大に社会経済研究室を設立した。その後、1966年に社会経済研究所となる。森嶋は、京都大学で、高田保馬と青山秀夫の教えをうけている。高田の京大での教え子には他に、柴田 敬、青山秀夫らがいる。

柴田 敬(1902年～1986年)は、海外留学も経験し、国際的に評価される理論経済学者であった。柴田は、戦後GHQにより公職追放となり、京都大学の教授の職を辞して、追放解除後、山口大学、青山学院大学で教授や経済学部長を務めた。



青山秀夫(1910～1992年)は、高田保馬に師事し、日本を代表する経済学者を多数育てたことで知られる。青山は、1962年に経済学部から独立し附置研究所になった京都大学経済研究所の所長を1966年から務めた。経済研究所では、1969年、ハーバード大学助教授の青木昌彦と東京大学助手の佐和隆光を招引している。それから間もなくして、京都大学経済研究所は国際的にも高い評価を受ける組織になった。

大阪大学の社会経済研究所と京都大学経済研究所が共に京大経済学部関係者によってつくられたことは興味深い。

京都大学理学部の数学科教授であった園 正造(1886～1969年)は高田保馬とほぼ同年代である。高田に影響を受け数理経済学の研究に手を染めたのであろう。1943年に「価格変動に伴う分離可能財の需給変動」(「国民経済雑誌」神戸大学)、1944年に「市場均衡の安定条件」(「経済論叢」京都大学)という優れた論文を発表した。前者は英訳され、森嶋通夫が始めた国際学術誌International Economic Reviewの第二巻(1961)に収録されている。

京都大学ではないが、園 正造に数学を教わった経済学者の中に、後に数理経済学と計量経済学を専門とし、神戸大学教授となった水谷一雄がいる。当時の数理経済学の最先端の問題について多くの論文を残した水谷一雄は、1956年に国際計量学会(Econometric Society)のフェローに選出されている。国際計量学会は経済学で最も権威のある学会であり、その会員の中で優れた業績をあげた経済学者に与える称号がフェローである。水谷は、自身の国際的なネットワークを用いて、教え子をアメリカに送り、その学生たちが立て続けに国際的な一流誌に論文を発表した。水谷が1940年に発表した論文「弾性の基本法則」(国民経済雑誌)の手法は、留学先のアメリカで神戸大学の学生が使ったことで、アメリカの同級生や指導教官に使われ、今では世界中で使われている。

戦前および戦後初期の京都大学の研究者が、現代の我が国の経済学に与えた影響が非常に大きいことが分かる。

(にしむら かずお 平成22年退職 元経済研究所教授、現経済研究所特任教授、専門は経済学)

## 洛書

## 旅三昧

黒田 知宏



旅は研究職という仕事の楽しみの一つだ。学会でもなければ決して行かないような所へ行き、いろんな国の人々と議論し、新しい刺激を得て帰ってくる。ふと、研究職とは旅から旅へ研究発表という名の芸を売って生きる旅芸人ではないか、と思うことすらある。

考えてみれば、私の人生は常に旅に満ちていた。別府に生まれ、父の職場のあった宇部で一年弱過ごし、父の転職に伴って京都に移り住みと、物心つくまでに二度も大旅行をしている。子供の頃は母の実家のある佐賀へと年に1～2回旅をするのが何よりの楽しみであった。中学受験に失敗し、中学校の6年間は毎日片道2時間かけて奈良まで通った。悪友達とは毎日の旅の途中で無数の寄り道をするだけに飽き足らず、休みごとに青春18切符を片手に日本中を旅した。院生として研究発表のために沖縄を訪れたとき、気がつけば47都道府県全てに足を運んでいた。

研究者になってからも、国際会議で海外に出向くだけでは飽き足らず、休みを見つけてはあちらこちらへ旅に出る日々を過ごしている。この間、訪問した国と地域は約40ヶ国に及び、南極大陸を除く六大陸全てに足跡を残してきた。基本的に最果てに行くのが好みようで、人が定住する最南端の都市ウシュアイアや最北端の都市ロングイヤービンにも足を伸ばした。ロングイヤービンでは図らずも開闢百周年の記念式典の日に滞在することもできた。旅の足跡の一部は筆者のWebサイトに残している。

時には国際会議出席自身を休暇の一部とし、休暇の真ん中で仕事をこなすことも多い。国際会議を休暇の真ん中に入れるのは、開催地周辺をゆっくり旅したいからなのだが、情報ネットワークが発達した今、休暇であってもお構いなしに世界のどこにいても、仕事に追われるようになった。残念ながら旅は非日常ではなくなりつつある。現在は病院の情報システム担当者なので、容赦なく仕事が追ってくる。

休暇をとともにする家人はすっかりあきらめ顔である。

振り返ってみれば、最初に海外ホームステイした1991年は手紙と電話だけが日本との連絡手段だった。1994年の留学では電子メールが、2001年の留学では不安定ながらIP電話が使えるようになり、2006年の留学ではSKYPEでこっそり学生指導をするようになっていた。2006年の留学時には、私が留学していることに全く気がついておられなかった病院職員の方もいらしたようだ。情報工学を学び、研究する者として、情報技術は確かに社会を変えてきたが、本当に人を幸せにしてきたのだろうか、考えることしきりである。旅は自らの足跡と存在意義を自問する機会であるのかも知れない。

旅は人生の転換点にもなる。後期試験でどうにか引っかけた京都大学工学部情報工学科で4年間を過ごしたものの、大学院受験に失敗して、奈良先端科学技術大学院大学(NAIST)の院生として再び奈良に舞い戻り、生涯の師となる千原國宏教授と出会うことになる。千原先生からそれまで全く考えていなかった博士課程進学を勧められたのは、日本国際学生技術研究協会(IAESTE)の海外インターンシップで滞在していたヘルシンキ工科大学から、「隣国だから」という理由で呼び寄せていただいたスウェーデン・リンシェーピング大学への共同研究打合せ旅行の道中だった。あれが、超学歴社会のフィンランドの現実を見た直後の旅で無かったら、私の人生は今とは大きく違っていただろう。

NAISTに奉職してすぐに結婚した際、「どこで働くかが判らないので、せめて関西一円どこでも行けて、単身赴任しても妻が困らぬ所に」と妻の実家に近い大阪市西部に居を構え、まもなく15年になろうとしている。この間、多くの方々に気にかけていただいたおかげで、幸いにして関西一円のどこかに職を得続けることができ、京都・奈良・大阪を渡り歩いてきた。職が変わるたびに訪れる場所も増え、ときに「一人三都物語」と独りごちつつ、京阪奈を一日で回りながら、日々大阪・京都間の鉄道の旅を愉しんでいる。

—…さて、明日はどこへ出かけましょうか。

(くろだ ともひろ 医学部附属病院准教授 専門は医療情報学)



## 栄誉

## 山中伸弥 iPS 細胞研究所長、山田康之名誉教授が文化勲章を受章

このたび、山中伸弥iPS細胞研究所長、山田康之名誉教授が平成24年度文化勲章を受章され、11月3日(土)、皇居において親授式が行われた。以下に各氏の略歴、業績等を紹介する。

山中伸弥iPS細胞研究所長は、昭和62年3月神戸大学医学部を卒業、国立大阪病院臨床研修医を経て、平成5年3月大阪府立大学大学院医学研究科博士課程を修了後、同年4月、研究員として米国グラッドストーン研究所に留学した。帰国後、平成8年1月大阪府立大学医学部薬理学教室に戻った後、同11年12月に奈良先端科学技術大学院大学遺伝子教育研究センター助教授に就任し、同15年9月同教授となった。平成16年10月京都大学へ移り、再生医科学研究所再生誘導研究分野教授に就任した。平成20年1月物質-細胞統合システム拠点iPS細胞研究センター長を併任し、改組により、同22年4月よりiPS細胞研究所長に就任した。現在は、iPS細胞研究所教授で、同研究所長、物質-細胞統合システム拠点連携主任研究者および米国グラッドストーン研究所上級研究者を兼務している。

同所長の研究グループは、成熟した細胞から、ES細胞(embryonic stem cell: 胚性幹細胞)に似た、ほぼ無限に増殖する能力と様々な細胞に変わることのできる能力を有する人工多能性幹細胞(induced



pluripotent stem cells: iPS細胞)を世界で初めて樹立した。iPS細胞技術は、ES細胞が持つ生命倫理的問題を回避し、病態モデルの作成・薬の有効性・副作用の試験や毒性テストのための研究ツールとして活用されており、創薬や治療法の開発に大きく貢献する可能性があるとして評価されている。この業績により、同所長は、ラスカー賞、ガードナー賞、京都賞、ミレニアム技術賞などを受賞した。また、平成22年には恩賜賞、日本学士院賞受賞、文化功労者に選ばれ、本年ノーベル生理学・医学賞を受賞している。

同所長は、「文化勲章受章は身に余る光栄であり、今まで以上に研究活動に専念し、新しい薬剤や治療法を一日も早く、少しでも多くの患者さんのもたらに届けられるよう仲間の研究者とともに精進する」と述べ、また、同所長が奈良先端科学技術大学院大学の助教授に採用された当時、同学学長であった山田康之博士も本年文化勲章を同時受章されたことに同所長は「大変光栄なことである。」と述べている。

今回の文化勲章受章は、これまでの同所長の一連の業績が評価されたものであり、大変喜ばしいことである。

(iPS細胞研究所)

山田康之名誉教授は、昭和32年京都大学農学部卒業、同34年同大学院農学研究科修士課程修了後、同学部助手、助教授を経て、同57年同学部附属生物細胞生産制御実験センター教授、平成2年同学部教授となり、同6年から奈良先端科学技術大学院大学教授を併任した。平成6年10月本学を退官し、同年11月奈良先端科学技術大学院大学教授となり、本学を併任(同7年3月まで)、同7年4



月に京都大学名誉教授の称号を受けられた後、同9年から同13年まで同大学学長として活躍された。また、平成7年から日本学士院会員である。

同名誉教授は、植物分子細胞生物学・植物バイオテクノロジーの分野において、数々の先導的研究を推進し、優れた研究業績を挙げるとともに、我が国の植物科学を先導されてきた。同名誉教授の研究業績の概要は、分化全能性をもつ植物細胞培養の重要性に着目し、その分子機構の理解と応用のために、幾多の大課題を解決してきたことにある。昭和43年、

当時困難とされていた単子葉植物イネ細胞培養からの個体再生に初めて成功し、禾穀類のバイオテクノロジーに先鞭をつけた。さらに、植物培養細胞系を用いた植物細胞機能の生化学・分子細胞生物学研究に着手し、植物培養細胞における機能発現のモザイク性を明らかにするとともに、細胞培養による有用二次代謝産物高生産株の育成、有用二次代謝産物の工業的生産の基盤を確立した。また、これらの細胞系を用いて有用二次代謝物質の生合成機構を解明し、さらに単離した遺伝子を用いた薬用植物の分子育種の道を拓く等、同分野の発展に多大なる貢献をし、世界的に極めて高い評価を得ている。

これらの業績に対して昭和62年島津賞ならびに日本農芸化学会賞、平成3年日本学士院賞を受賞された。また、平成4年英国国際バイオテクノロジー研究所フェロー、同6年スウェーデン王立科学協会外国人会員、同11年米国科学アカデミー外国人会員に選出されている。また、平成11年には文化功労者として顕彰されるとともに、同16年瑞宝重光章を受章、同18年京都府文化賞特別功労賞を受賞されている。

今回の文化勲章受章は、これまでの同名誉教授の一連の業績が評価されたものであり、大変喜ばしい。  
(大学院農学研究科)

## 朝尾直弘名誉教授、諸熊奎治福井謙一記念研究センターシニアリサーチフェローが文化功労者に選ばれる

このたび、朝尾直弘名誉教授、諸熊奎治 福井謙一記念研究センターシニアリサーチフェロー(研究員(学術研究奨励))が平成24年度文化功労者に選ばれ、11月5日(月)に東京都内で顕彰式が行われた。以下に各氏の略歴、業績等を紹介する。

朝尾直弘名誉教授は、昭和29年京都大学文学部史学科を卒業、同大学院文学研究科博士課程を経て、同43年文学部助教授、同55年教授に就任し、国史学第二講座を担当した。平成7年停年により退官し、京都大学名誉教授の称号を受けた。その後京都橘女子大学教授となり、同14年同名誉教授、現在は住友史料館館長の職にある。



同名誉教授の研究は、日本近世史に関するものであるが、大きく三つに分けられる。第一は近世封建社会成立期の基礎構造の研究で、近世社会の成立過程を矛盾の発展において動態的に把握した、その分析の緻密さと重厚さは学界で高く評価されている。第二は幕藩制国家に関する研究で、その中核をなす「将軍権力」が生み出される必然性とその過程とを明らかにした。この成果は『将軍権力の創出』として刊行され、平成7年度の角川源義賞を受けた。第三は

鎖国研究で、従来の対外交渉史的な枠組ではなく、国家論の視点から鎖国論を再構築したもので、現在も多く研究者によってその視角が継承されている。以上は『朝尾直弘著作集』全6巻としてまとめられた。

こうした自身の研究成果のほか、『京都町触集成』公刊の中心となって京都研究・近世都市研究に大きく貢献し、多くの自治体史刊行にも携わる。また『岩波講座日本歴史』『日本の社会史』『日本の近世』『岩波講座日本通史』などの編集委員を務め、研究動向を総括しその進展を図った。なお『日本の近世』は毎日出版文化賞特別賞を受けている。学界では、史学研究会理事長、歴史科学協議会代表委員をはじめ多くの委員を務めるなど斯学の発展にも寄与している。

同名誉教授は、学内では文学部博物館長、学生部長、文学部長、附属図書館長を歴任するなど、大学行政に多大な功績を残すとともに、国立国文学研究資料館運営協議員・評議員、国立歴史民俗博物館評議員、文部省大学設置・学校法人審議会専門委員、

文化庁文化財保護審議会専門委員を務めるなど、学外においても大学・文化行政に尽力している。

これらの多年にわたる業績に対して、平成11年に

紫綬褒章を受章され、さらにこのたび文化功労者として顕彰されたことは、誠に喜ばしいことである。

(大学院文学研究科)

諸熊奎治福井謙一記念研究センターシニアリサーチフェロー

(研究員(学術奨励))は、昭和32年3月京都大学工学部を卒業、同34年3月同大学大学院工学研究科修士課程修了、同37年3月同大学大学院工学研究科博士課程単位取得退学(同38年3月修了、工学博士の学位授与)、同37年4月から同41年5月まで同大学工学部助手、その後米国のコロンビア大学、ハーバード大学、ロチェスター大学での勤務等を経て、同51年12月分子科学研究所教授、同56年4月改組により岡崎国立共同研究機構分子科学研究所教授、平成5年1月から米国エモリー大学教授、同18年9月京都大学福井謙一記念研究センターリサーチリーダー、次いで同24年4月に同センターのシニアリサーチフェローに就任し、現在に至っている。この間、平成5年4月岡崎国立共同研究機構分子科学研究所名誉教授、同7年4月総合研究大学院大学名誉教授、同18年9月米国エモリー大学名誉教授の称号を授与された。さらに平成



12年より国際量子分子科学アカデミー会長を2期6年間にわたって務められた。

同シニアリサーチフェローは永年にわたって世界的なスケールで理論化学・計算化学の教育と研究に努められ、また教育研究関係の人材育成を行ってきた。特に分子の電子論とその複雑分子系の構造、反応、機能の理論的研究の世界的権威としてこの分野の発展に多大で重要な貢献をされており、以上の功績によって昭和53年にInternational Academy of Quantum Molecular Science (IAQMS) Medal、平成4年に日本化学会賞、同5年にThe World Association of Theoretical Organic Chemists (WATOC)からThe Schrödinger Medal、同17年にAsian Pacific Association of Theoretical & Computational ChemistsからThe Fukui Medal、同20年に恩賜賞、日本学士院賞、さらに同22年に瑞宝中綬章を受けられた。

これらに続いて今回の文化功労者の顕彰を受けられたことは誠に喜ばしい。

(福井謙一記念研究センター)

## 西村和雄名誉教授が紫綬褒章を受章

このたび、わが国学術の向上発展のため顕著な功績を挙げたことにより、西村和雄名誉教授が11月3日(土)に紫綬褒章を受章された。

西村和雄名誉教授は、昭和45年3月東京大学農学部を卒業し、同大学大学院農学系研究科に進学後、米国ロチェスター大学大学院経済学研究科博士課程に留学し、同53年2月Ph.Dの学位を取得された。東京都立大学、カナダ、アメリカ



の大学で教鞭をとり、昭和62年4月に京都大学経済研究所教授に就任。平成18年4月から同22年3月まで経済研究所長を務められ同年3月に退職し、4月から京都大学経済研究所特任教授として現在に至る。

同名誉教授は、昭和54年から、無限期間マクロ経済動学の研究において、立て続けに、その後の経済学の方角付けをするような論文を発表した。まず、同年に、当時未解決であった連続時間最適モデルに景気循環を意味するリミットサイクルの存在問題に解答を与える論文を発表し、その後、昭和58年に無



限次元の離散時間最適モデルにおける収穫逓増のケースの最適解の性質を明らかにする論文を発表し、昭和60年には最適でありながらゆらぎを持つ解の存在を保証する十分条件を発表した。これらの論文はこの分野を志す研究者の必読文献として現在もなお高い評価を受けている。

1990年代に、無限期間の最適問題の解がカオスになる十分条件を明らかにして、発表してきた。2000年代には、外部性をもつ経済動学モデルや内生的成長モデルの研究において、経済主体の期待や外部効果を通じた相互依存が、動学的均衡の決定に及ぼす影響に取り組んだ。

以上の同名誉教授の主要論文は、平成23年に、Nonlinear Dynamics in Equilibrium Models-Chaos, Cycles and Indeterminacyとして、Springer社から出版された。

同名誉教授は、以上の研究を通じて、非線形経済動学の分野を確立すると同時に、日本および世界の

経済理論の発展をもたらすことに貢献した。

これらの研究は、複雑系研究者の中でも評価が高く、カリフォルニア州立大学に本部をもつ国際的な複雑系研究所Institute for Complex Adaptive Matterの常任理事や複雑系研究の中核であるサンタフェ研究所の特任教授を務めている。

邦文での著書『マクロ経済動学』（西村和雄・矢野 誠著、岩波書店、2007年）は、日本経済新聞社から第51回日経・経済図書文化賞を受賞し、またこれまでの研究業績に対し、2007年にはフランスのエックス・マルセーユ第II大学から名誉博士号が、2010年には京都新聞大賞文化学術賞が授与されている。

さらに、国際計量経済学会のFellow（特別名誉会員）、日本経済学会会長などの要職を歴任し、国内外の学会の発展に多大の貢献をした。

このように、同名誉教授が、経済理論において果たした学術的貢献はまことに顕著である。

（経済研究所）

## 話題

### 京都賞生物特別講義を開催

芝蘭会館において、11月14日（水）公益財団法人 稲盛財団との共催により、青少年育成プログラムのひとつとして、第28回京都賞生物特別講義を開催した。

青少年育成プログラムとは、同財団が主催する京都賞授賞式および関連行事の期間（京都賞ウィーク）において実施される、小学生から高校生、大学生などの若い世代を対象にしたプログラムで、本学はその一部を同財団と共催している。

当日は、淡路敏之 理事・副学長（教育担当）および忽那武範 稲盛財団事務局長の挨拶の後、京都賞基礎科学部門受賞者の大隅良典博士（東京工業大学特任教授）による「科学する心 - 発見の喜び - 」と題した講演が行われ、出席した京都府内の高校生約



大隅博士と高校生による質疑応答の様子

230名が真剣に聞き入っていた。

その後、大隅博士を囲んで質疑応答が行われ、活発なやり取りがなされた。

（渉外部）

## 社寺見学会を実施

10月20日(土),平成24年度京都大学社寺見学会『秋の伊勢路をたずねて』が行われ,84名が参加した。行程順に,伊勢神宮・内宮(三重県伊勢市),金剛證寺(同市)および御城番屋敷(三重県松阪市)を巡り,それぞれの専門分野の講師の解説に,参加者一同,興味深く耳を傾け,晴天にも恵まれてとても有意義な一日を過ごした。

伊勢神宮(内宮)では御正宮まで歩いてお参りし,金剛證寺では,本堂をはじめ,重要文化財に指定さ



御城番屋敷の町並みを散策する参加者



金剛證寺宝物館で興味深く見学する参加者

れている木造雨宝童子立像や木造地藏菩薩立像等が保存されている宝物館に興味深く見学し,また,御城番屋敷では,かつて松阪城の警護を任された紀州藩士の屋敷とその情緒ある町並みを満喫した。

当日解説いただいた講師は次のとおりである。

(歴史)西山 良平(人間・環境学研究科 教授)

(建築)山岸 常人(工学研究科 教授)

(造園)柴田 昌三(地球環境学堂 教授)

(美術)根立 研介(文学研究科 教授)

(総務部)

## 京都大学宇治キャンパス公開2012を開催

宇治キャンパスでは,10月20日(土)・21日(日)「京都大学宇治キャンパス公開2012」を開催した。毎年秋に行うこのイベントは,宇治キャンパスでどのような研究を行っているかを一般の方に広く知ってもらい,大学の研究活動への理解を得るとともに,科学の魅力について考えてもらうことを目的として開催している。16回目となる今年は「知るよろこび 考える楽しさーのぞいてみよう科学の世界ー」をテーマに最先端研究をわかりやすく紹介した。

初日の20日は,宇治おうばくプラザにおいて,エネルギー理工学研究所長 尾形幸生 教授による「社会が受容できるエネルギーの選択」,化学研究所 栗原達夫 教授による「地球環境と私たちの暮らしと微



特別講演会で講演する尾形所長

生物」,防災研究所 林 春男 教授による「災害に負けないしなやかな社会ー防災の科学入門ー」と題して特別講演会を行った。また,19日にはプレイベント



として工学研究科の公開シンポジウム、21日には化学研究所および生存圏研究所の公開講演会を行った。

公開ラボでは、自分だけのスーパーボール作りができる「身のまわりの高分子材料」や大型施設による実験「居住空間の災害を観る」など、普段は見ることでできない研究施設や実験室の公開などを通じて科学に親しんでいただいた。

地域のイベントとして幼児から高齢者まで楽しめる工夫をこらしたプログラムに、毎年足を運んでくれる方も増え、宇治キャンパスおよび宇治川オープンラボラトリー会場二日間であわせて2,800名を超える参加者が秋の一日を楽しんだ。



公開ラボ「身のまわりの高分子材料」

(宇治地区事務部)

## 宇治キャンパスでリサイクルフェア・交流会を開催

外国人研究者・留学生に対する支援の一環として、10月26日(金)宇治地区においてリサイクルフェアを開催した。宇治地区関係者から家庭に眠っている遊休品の提供を受け、無償で外国人研究者・留学生に提供している。

第7回目の開催となる今年は、昨年に引き続き、外国人研究者・留学生と宇治地区教職員との交流会を同時に開催した。

リサイクルフェア会場となった、宇治おうばくプラザ ハイブリッドスペースでは、関係者の協力により集まった450点近くの物品が並べられ、研究者、留学生や、家族など80名を超える来場者があった。毎年大人気のこの催しは、ベッドや机などの家具から電化製品、冬に向けての布団や毛布、子供用の雑貨やおもちゃなど、单身者にも家族連れにも喜ばれている。

リサイクルフェア会場の隣に準備された交流会会場では、リサイクルフェアで選んだ品物を囲んで、参加者はお茶を片手に楽しい歓談の時間を過ごした。今年は、日本人学生企画の自己紹介ゲームも行われ、会場は和やかな雰囲気に包まれた。



リサイクルフェア会場

交流会には宇治地区研究所の所長も参加し、生存圏研究所の津田敏隆所長が挨拶の後、出席の研究所長及び受入れ教員を紹介された。また、引き続き行われた電化製品等の抽選会で、会場は大いに盛り上がった。

宇治地区では、外国人留学生100名程度が在籍し、年間850名程度の外国人研究者が研究のために来訪、滞在しており、今後もこういった生活支援事業を続けていく予定である。

(宇治地区事務部)



### 第3回京都大学風景写真コンテスト表彰式を開催

第7回京都大学ホームカミングデイのイベントの一つとして、今年で3回目となる京都大学風景写真コンテストの表彰式を10月30日(火)に行った。

テーマを、「“あつい”京大」とし、暑い「夏」、熱い「教育・研究現場」、「Hotな京大」等、「あつい」をイメージできる京都大学の風景を撮影した作品を卒業生、元教職員ならびに教職員、学生を対象に作品を公募したところ58点の応募があった。審査の結果、グランプリ1点、優秀賞3点、入賞6点および審査委員長特別賞1点を決定し、表彰式においてグランプリおよび優秀賞の受賞者に、小寺秀俊 理事・副学長から記念品を授与した。

グランプリのほか、受賞作品計11点は、11月3日

(土)から11月25日(日)までの間、百周年時計台記念館1階の京大サロンにて展示し、その後、12月中旬から平成25年2月中旬まで東京オフィスに展示する予定である。



集合写真

#### 受賞者一覧(敬称略)

賞	氏 名	所 属 等	題 名
グランプリ	尾城 徹雄	農学部 卒業生	「情熱一気飲み」
優 秀 賞	河内 良彰	経済学研究科 博士後期課程 1 回生	「百万遍門と夏空」
優 秀 賞	井関 竜也	法学部 1 回生	「達成の瞬間」
優 秀 賞	谷村 道子	化学研究所 職員	「がんばれ！ちびっこ博士」



【グランプリ】尾城徹雄「情熱一気飲み」



【優秀賞】河内良彰「百万遍門と夏空」



【優秀賞】井関竜也「達成の瞬間」



【優秀賞】谷村道子「がんばれ！ちびっこ博士」

(渉外部)



## 韓国・ソウル大学で AEARU「18th Annual General Meeting」を開催

京都大学が加盟するThe Association of East Asian Research Universities(AEARU)(東アジア研究型大学協会)の第18回総会(Annual General Meeting)が韓国のソウル大学の主催で11月2日(金)に開催された。AEARUは東アジアにおける知の創造および学術交流の促進のために結成された大学協会である。日本・中国・韓国・香港・台湾の5カ国／地域から各地域を代表する17の大学が加盟している。京都大学からは三嶋理晃理事・副学長(病院・国際担当),研究国際部職員2名の計3名が出席した。

議長であるLih. L. Chen清華大学(台湾・新竹市)学長の議事進行のもと,2012年度に開催したAEARU事業について各大学より報告があり,財政計画について審議された。また,東アジアが世界を牽引していくためにAEARUとしてのアイデンティティを強化する方法として,オックスフォードやケンブリッジなどヨーロッパの主要な大学が加盟し,かつ,AEARUに非常に似通った性格を持つLeague of Research Universities(LERU)との連携が提案され,Kurt Deketelaere LERU事務局長が講演を行った。さらに,加盟校同士の関係が強く,活発な議論が出来るというAEARUの良さを維持しながら,よりAEARUを強化できる大学の新規加盟と,加盟校のAEARUへの積極的な参画を促すために,松本 紘総長がワーキンググループ議長として提出したAEARU規定の改正について審議され,満場一致



AEARU総会出席者

で改正が決定した。

総会の後半では,AEARU総会では初めてゲストスピーカーが招かれ,Phil Baty Times Higher Education編集局長およびDeketelaere事務局長が講演を行い,加盟大学の学長・副学長と情報を交換し,活発な議論を繰り広げた。総会の最後には,主催校であるソウル大学のSheen Seongho国際部副部長より,ソウル大学が世界大学ランキングで飛躍的にランキングを上昇させることができた戦略について講演があった。

次回AEARU第19回総会は,清華大学で開催される。2011年に本学が開催した第1回AEARU漢字文化シンポジウムが,AEARUのFlagship Eventとして継続開催することが決定されており,その第2回AEARU漢字文化シンポジウムも同時開催される。

(研究国際部)

## 教育学研究科附属臨床教育実践研究センター公開講座「精神分析とこころの解放」を開催

教育学研究科附属臨床教育実践研究センターでは,毎年,深刻化する教育問題への取り組みの一環として,現代人のこころの理解に主眼をおいた公開講座を開催している。

今年度は,「精神分析とこころの解放」と題し,本センター ヴィクター・セドラック客員教授を講師として,11月4日(日)に京都テルサ第一会議室で行い,心理臨床家や教育関係者,看護師,学生など約



60名の参加があった。

講演ではまず、精神分析理論に基づきこころの発達がどのように進むのかについて語られ、その発達過程で悲しみのような否定的な感情を排除せず、自ら経験していくことの重要性が語られた。さらに臨床例を交えて、そのような困難な過程において精神分析家が果たす役割についても話された。また、指定討論による議論を通して、精神分析家の限界とそれを支える枠組みの重要性などが語られた。精神分析実践の経験が豊富な講師の語り口に接した参加者からは、「理論も事例も日々の臨床に根差して語られ印象的だった」、「関わりたくない感情に気付き関わっていくことが、豊かな人生を送る上でいかに大切であるか、事例を交えてお聞きすることができ、今後の対人援助の助けになると思った」などの感想が寄せられ、貴重な機会となった。



熱心に耳を傾ける受講者

本講座は、例年参加者から大変好評を得ており、来年度以降も、現代社会の複雑なこころの問題を理解するための視点を一般市民に向けて広く提供できる場となるよう開催していくことを考えている。

(大学院教育学研究科)

## 訃報

このたび、<sup>たつみ かず お</sup>異 和夫名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に同名誉教授の略歴、業績等を紹介します。

### 異 和夫 名誉教授



異和夫先生は、11月6日逝去された。享年83。

先生は、昭和37年京都大学大学院工学研究科博士課程を修了。建設省建築研究所研究員、京都大学工学部助教授などを経て、昭和43年同教授に就任、建築学専攻建築計画学講座を担当された。平成5年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、平成5年4月から同13年3月まで福山大学工学部教授を務められた。

先生は建築社会システム、中でも建築生産論やハウジング論に関する研究において優れた研究業績を

残され、その発展に寄与されるとともに、建築行政の分野においても多大の貢献をされた。主な編著書に『建築企画論』、『現代社会とハウジング』『行政建築家の構想』等がある。

また、都市住宅学会、日本建築学会、兵庫県住宅審議会、全国建築審査会協議会などにおいて、会長、監事等の要職を歴任された。さらに、平成17年に発覚した耐震強度偽装問題で行政の対応を検証する国土交通省の私的諮問機関の緊急調査委員会の座長を務められた。これら一連の研究活動、社会貢献活動により、日本建築学会大賞、建設大臣表彰などを受けられた。

(大学院工学研究科)